

modernのmode性というレリヴァンスからみた、「萌え文化」のパイオニアとしての“権威あるmode”

元武蔵大学 藤田哲司

1 目的

セッション参加者に共有されている問題意識、「社会学理論が瀕死状態にある」理由の1つは、「今日の時代にとっての『先駆者』を発見する」ツール・手段として社会学理論が果たして有効なのか(あまり使えないのでは?)という「懐疑」にある。理論の有効活用を試みるべく、本報告はレリヴァンス論に基づき、“modern”と萌え文化(現代日本のポップカルチャー)を“権威あるmode”と関連づけることを提唱する。その上で近現代日本に歴史的に先行して存在してきたmode(形・様式・流儀)を明確にし、「リキッド近代」時代における権威の在り方について展望を示したい。

2 方法

昨年に引きつづき、A・シュッツのレリヴァンス=関連づけの体系という理論的手法の活用を、本報告でも試しつつけていく。この試みには二重の含意がある。①『命題コレクション』のような理論の実践的な「読みこみ」、現代社会の困難に向きあう「武器」としての“研ぎ澄まし”というこれまでの社会学理論の蓄積に対し改めて光を当てるという意味、②近代(modern)、萌え文化を歴史上の先駆的存在としての“権威あるmode”と「関連づける」行為の、「始原(創始)探求」という権威研究上の意味、という2点である。“mode”=規格尊重という土壌の存在について、具体的には鎌倉新仏教を中心に指摘したい。現代日本人の価値観に内在している、権威ある“mode”としてのモダニティ(近代的性質)の抽出を報告者はねらいつつけているが、その始原的源泉は鎌倉時代に勃興した新しい仏教諸派の“教え”にあるとみることができる。そもそも鎌倉新仏教は、明治以降の歴史学・宗教学では、ルターの宗教改革になぞらえてとらえられてきた。報告では、こうしたいわば「プロ倫的役割」を超えた、そのより深部にある“mode”的影響を探求する。ヴェーバー流の問い、なぜ日本でのみ近代化=産業化が成功したのか、という問いを超えて、なぜ日本でのみ萌え文化が生じたのかという、問いの社会的パラダイムへのシフトが必要なのである。

これまでの近代化論的スタンスでは、「非西欧で資本主義化(産業化)に成功した日本」というテイストが強い。「経済」への偏重がみられ、産業化(経済的繁栄)にばかり気をとられた問題設定がされている観がある(日本的経営にみられる“忠”の探求など)。とはいえ、近代化=産業化ではない。これまでの「近代化=産業化に成功した日本」という研究ではとらえきれない、日本ならではの形へのこだわり、“mode”への執着について、文化的土壌への「まなざし」を通して解明すべき要素がもっとあるのではないだろうか?

3 結果・結論

①日本社会学の用語の語源的制約(「始原探求」問題)、②「近代性」における非経済的要素の重要性(近代化論の産業的側面への偏重)、③modeのレリヴァンス問題:「関連づけ」という実践によって見えてくる萌え文化という社会現象。近代化やポップカルチャーは、modeという「先駆的存在」(pioneer)から社会学理論的に、今日改めて光を当てるべきテーマである。過去から現代の「先駆」を読み解く理論的営為は、現代社会から未来の「先駆」を読み解く想像力の礎となるはずである。

Berndt, Jaqueline [1990=2007] *Bilderfluten·Phänomen Manga*=佐藤和夫・水野邦彦訳『マンガの国ニッポン:日本の大衆文化・視覚文化の可能性』花伝社

江原由美子 [1981] 「シュッツにおけるレリヴァンスの問題をめぐって」『社会学評論』32-3 日本社会学会

福嶋亮大 [2010] 『神話が考える ネットワーク社会の文化論』青土社

藤田哲司 [2011] 『権威の社会現象学 人はなぜ権威を求めるとか』東信堂

本田透 [2005] 『萌える男』ちくま書房

片桐雅隆 [1978] 「レリヴァンスと社会的世界」『人文研究』大阪市立大学文学部

Schutz, A. [1970] *Reflections on the Problem of Relevance* (ed. by Zaner, R., M., Yale Univ. Press.) =那須壽・浜日出夫・今井千恵・

入江正勝 訳 [1996] 『生活世界の構成』マルジュ社